

幼稚園の室内掲示物の「動物相」の調査

Census of “Fauna” in the Wall Displays of Preschool Classrooms

竹ノ下 祐 二

Yuji TAKENOSHITA

幼稚園の教室内の掲示物にはどんな「動物」が「生息」しているのだろうか。ある幼稚園の年長2クラスで調査したところ、17種167個体の「動物」の「生息」が確認された。ほとんどが実在する現生の動物で、約半数が哺乳類であった。ほとんどが先生または園児による手作りだった。先生による被造物は主に哺乳類で、着衣直立姿勢が多かった。一方園児による被造物は主に哺乳類以外の動物で、動物本来の姿をしていた。ここから、先生が作る動物は園児の「仲間」であり、園児が製作する動物は「自然界の存在」といえる。室内掲示の動物の様態は、園児に対し「哺乳類は人間を楽しませるコンパニオンアニマルである」という自然観を提示しているようである。室内掲示の動物相の高い多様性は、これらが間接経験として園児の自然観・動物観の形成に影響を与えるポテンシャルを持つ一方、それらが園児に対し誤った動物観を提示するおそれもある。

キーワード：幼稚園, 掲示物, 非実在動物, 保育者の動物観

はじめに

生物多様性の保全是全人類課題である。地球上の生物多様性を保全し、人類社会が持続的に発展してゆくためにはさまざまなてだてが必要だが、次世代への環境教育は重要な対策の一つである。環境教育の重要性は1992年に締結された生物多様性保全条約にも謳われている。我が国においても、環境基本法、教育基本法や関連法令に子どもへの環境教育の必要性が記されている。

「環境教育」の名のもとに行われる活動は、小学生以上の児童を対象にしたものが多い。しかし、就学以前の子どもへの環境教育も重要である。幼稚園教育要領(平成20年改訂版)においても、自然と触れ合うことを通じて子どもが生命の尊さに気づき、自然をいたわったり大切にすることを養うことが求められている。

これまで、幼稚園児が自然を尊重する態度を養うためには自然と触れ合う機会を作ることが重要だと指摘され、また実践されてきた。自然と触れ合う活動としては、自然野外での自然体験活動と、園内での栽培や飼育があげられる。文部科学省の「幼稚園教育要領解説」(平成20年改訂版)は、「共に遊んだり、世話をしたり、驚きをもって見つめたりするといった様々な身近な動植物などのかかわりを通して、命あるものに対して、親しみや畏敬の念を感じ、自分と違う生命をもった存在として意味をもってくる。そして、生命を大切にす気持ちを持ち、生命の素晴らしさに友達や教師と共に感動するようになる。」とあり、幼稚園で動植物の飼育や栽培を行うことを推奨している。多くの幼稚園・保育所が小動物や虫などの飼育を活動にとりいれており、子どもの発達、

とりわけ情緒面の発達に好影響を与えていることが報告されている^[5, 2]。

しかし、理論的、実践的研究のいずれもが、飼育活動が子どもの情緒面の発達や生命尊重の態度の涵養に役立つ/役立っていることは強調する一方、子どもが飼育活動を通じてどのような自然観、動物観を得ているかにはあまり関心がないようである。飼育活動から子どもがその飼育動物そのもののことをどう理解したかを検証した研究には藤崎によるものがあるが^[1]、数は限られている。たとえばウサギの飼育をした子どもが「ウサギとはどうもうな肉食獣である」というウサギ観を抱いたとしたら、かりに飼育を通じてその子どもが生命尊重の態度や他者への思いやりを身につけたとしても、その活動が成功したとは言えないだろう。

特定の動物に対する誤った観念は、しばしばその動物の保全にマイナスに働くことがある。たとえばゴリラは猛獣と思われたがゆえにゲームハンティングの対象となったし、チンパンジーは愛嬌があるという観念ゆえに愛玩用に捕獲されたりした。生物多様性保全の観点からは、子どもの情緒面の発達だけでなく、子どもの自然認識の具体的な内容にも注意を払うべきである。

ところで、保育者の関心の有無にかかわらず、子どもは幼稚園児くらいになるとさまざまな動物に対してさまざまな観念や好悪の印象を抱くようになるようだ。窪らは日米英仏の幼児を比較し、日本の子ども、とりわけ女兒がウサギ好きであることを示した^[4]。石田らはは東京都と埼玉県の子どもの幼稚園、小学校の児童を対象に行った調査で、子どもの好きな動物の多くは愛玩用動物かメディアに登場する珍獣であることを示した^[3]。

子どもの動物観はどのような体験を通して形成されるのだろうか。ひとつはメディア等から得られる間接体験である。上記石田らの調査は、子どもの動物観が間接体験に影響されることを示唆している。では、幼稚園における飼育体験はどうだろう。

ここに興味深い事例がある。鍋島らは研究対象の幼稚園における園児のウサギの飼育体験を詳細に記している。子どもたちはウサギとの濃密な関わりを通じ「ウサギがこどもと共に暮らす仲間になっていった」。にもかかわらずである。論文中に掲載されている園児が作成した切り紙や絵画のウサギのすべてが、ステレオタイプ化した、直立する擬人的なウサギなのである[5]。これはどう解釈すべきだろうか。

ここから、飼育体験は子どもの動物観に影響しないと考えるのはあまりに短絡的だろう。鍋島らの詳細な記述からは、飼育活動に付随して、園児に対してウサギを擬人化するようなさまざまな促しがなされていたことがうかがえる。むしろ飼育体験を通じて擬人的なウサギ観が強化された可能性さえ推測される。つまり、直接体験だけから動物観が養われるのではなく、活動を通じて保育者の動物観が意識的あるいは無意識的に子どもに投影され、それが子どもの動物観の形成に影響している可能性が示唆される。幼稚園という場やそこにいる保育者が子どもたちに提示している動物観はどのようなものかを知ることが、子どもの動物観、自然観の形成過程を明らかにする上で重要である。

考えてみると幼稚園での日常の保育活動のさまざまな場面で子どもたちは「動物」に遭遇する。通園バスはトラネコの姿をしているし、朝の読み聞かせの絵本にはヤギやブタ、オオカミがあらわれる。園庭にはゾウの滑り台があり、クリスマスシーズンには教室の壁でトナカイがサンタクロースの橇を引いている。これら非実在動物の種類や数、形態や行動は子どもの動物観の形成に影響するだろう。「幼稚園教育要領解説」には「テレビやビデオなどを通しての間接体験の機会が増えてきている現代、幼稚園で自然と直接接触する機会を設けることは大きな意味をもってきている。」とあるが、間接体験の機会はテレビやビデオだけでなく、幼稚園の中にも溢れていることに、保育者はもっと注意を払うべきである。

こうした問題意識のもと、本研究では幼稚園に「生息」する「非実在動物」の調査を試みる。その端緒として、教室内の掲示物にみられる動物に注目する。なぜなら教室の掲示物はクラスの環境構成の一部であり、遊具の意匠などと比べ、園全体あるいは担任の意思が投影されると考えられるからである。具体的には岐阜県のある幼稚園の年長クラスの室内に掲示されている「動物相」を調べ、そこから幼稚園の教員が子どもたちに提示している動物観にみられる特徴を考察した。

調査地

調査対象園は岐阜県関市にある中部学院大学附属桐ヶ丘幼稚園(高橋良明園長)である。今回は、年長(5~6歳児)の「ふじ組」「きく組」の2クラス(いずれも園児数は23名)について、室内掲示物を調べた。調査日はふじ組が2010年7月9日、きく組が7月16日である。

室内の掲示物の中にある「動物」を探し、同定と計数を行った。ここで「掲示物」の定義を「鑑賞されることを目的として、壁面やボードに貼られているもの、置かれているもの」とする。やや茫漠とした定義なので例を示す。園児が描いた絵や、先生が部屋の飾りとして貼ったもの、市販のカレンダーに描かれた絵は掲示物に含む。しかし、園児のロッカーに貼られた「おしるし」のシール、黒板に配置されたファンシーマグネットの意匠、本棚におかれた絵本の表紙などは、今回は掲示物から除外した。

発見された動物は以下の基準にしたがって分類した。

- 現生動物: 最新の系統分類に沿って、可能な限り種(species)まで同定する。
- 絶滅動物: 現生動物と同じ
- 想像上の動物: 想像上の動物には広く世間に受け入れられた分類基準が存在しない。そこで大きく3種類に分類した上で、可能な限り詳しく記述する。
 - ▷ ヒト型(humanoid): 人間に似たもの。例: 天使、魔女、ゴルゴン、ゲゲゲの鬼太郎、ヒト型宇宙人(ヨーダ、ウルトラマン)など
 - ▷ 半獣半人(therianthrope): 人魚、蝶の妖精、チューバッカ、猫娘など
 - ▷ 動物型(beast): グレムリン、ムーミン、龍、ヤマタノオロチ、エイリアンなど
 - ▷ その他: オバケのQ太郎、唐笠オバケ、一反木綿、目玉おやじなど

アニメや映画のキャラクターも、その設定上動物であれば現生および絶滅動物として分類する。たとえばミッキーマウスはネズミ、サンリオのキティちゃんは猫である。ただし、ロボットは動物ではないので除外する。すなわち、ドラえもんは想像上の動物に含まれない。

結果

室内にいる動物たち

ふじ組

天井から四葉のクローバーの葉をくわえた白い鳩が4羽ぶらさがっている。素材はトイレトペーパーの芯。廊下側の壁面には子どもたちの「おとうばん表」がある。レーシングサーキットを模した背景に、グループごとに一台のレーシングカーに乗っている子どもたちが描かれている。サーキットの脇には、レースクイーンの扮装(藤色)をしたピンクのウサギとオレンジ色のネコがいる。

おとうばん表の横には園児の「おたんじょうび表」があり、そこに描かれた子どもたち一人ひとりにはほうきに乗った魔法使いの姿をしている。部屋の正面、黒板の左側には、子どもたちの通園バスコース表があり、その下に先生の手作りによる今日の日付の掲示がある。年、月、日の数字の下にはそれぞれ赤いシャツを着た白いブタ、オレンジのシャツを着たクリーム色のリス、ピンクのシャツを着た白いウサギが笑顔で立っている。黒板の右側には市販のカレンダーがかけてあるが、6月の絵柄はクマ、カエル、ヒヨコであった。黒板の右にはピアノがあり、ピアノの上の壁面には、6月に子どもたちが製作した折り紙工作のレインコートを着た人間が人数分貼ってある。それらの下には、先生が作ったウサギ模様の傘をさし、長靴を履いたピンクのウサギ、カエル模様の傘をさし長靴を履いた黄緑のカエルがいる。上にはプロペラ飛行機に乗り傘をさした黄緑のカエルがおり、その傘の上には茶色の殻をつけた肌色のカタツムリが乗っていた。

きく組

天井の白い鳩と、「おとうばん表」のウサギ、ネコはふじ組と同じであった。ただしレースクイーンのウサギとネコの衣装は、ふじ組が藤色だったのに対し、きく組はキクの花の黄色であった。担任の先生によると、これらは年度のはじめに同じ学年のクラスの担任で相談し、学年の一体感を出すために同じものを作っているとのことであった。きく組では「おとうばん表」の左隣に園児の製作物、右隣に「おたんじょうび表」が配置して

ある。園児の製作物は折り紙のカエルとオタマジャクシだった。カエルは葦のような単子葉植物が茂った地面の上に、オタマジャクシは池の中にいた。「おたんじょうび表」に描かれた子どもたちは、男子がディズニーキャラクターのミッキーマウス、女子がミニーマウスだった。今日の日付の掲示には動物はおらず、そのかわり年、月、日の数字の書かれたひめくりの画用紙がミッキーマウスの形をしていた。園庭に面したサッシの扉のところには、青いビニールひもがのれんのようにぶらさがっている。おそらくこれは梅雨の雨をイメージしていると思われるが、その中に園児が製作したサカナが泳いでるので、7月の海なのかもしれない。ふじ組も同じようなビニールひもの装飾があったが、サカナはおらず、水色の画用紙で作られた雨滴があつらえてあった。教室の後ろには園児が描いた絵が掲示されていたが、その中に動物は描かれていなかった。

きく組は、壁面のあいたスペースに、先生が画用紙で作ったたくさんのディズニーキャラクターが掲示されていた。ディズニーキャラクターには動物が多い。園児の絵のまわりには、蝶の妖精とゾウ(ダンボ)、ダルメシアン(101匹わんちゃん)が4匹、教室の前面にはピアノの前に人間(白雪姫)が2人、人魚(リトルマーメイド)が2人、おとうばん表の上にクマ、ウサギが1匹ずついた。キャラクターを掲示する意図について先生に尋ねたところ、ご自身がたいへんなディズニーファンで、園児にもファンタジーの世界に囲まれた夢のある空間を提供したいということであった。

表1 生息が確認された動物の種と個体数

現生/想像上	綱	目	通名	先生製作		園児製作	既製品	
				キャラ	自作			
現生	Gastropoda (Pisces)	Pulmonata	かたつむり		1			
		(Teleostomi)	さかな			18		
	Amphibia	Anura	かえる		2	23	1	
			おたまじゃくし			23		
	Aves	Columbiformes	はと		8			
		Phasianidae	ひよこ(にわとり)				1	
	Mammalia	Carnivora	くま		1		1	
			ねこ		2			
			いぬ		4			
		Cetartiodactyla	ぶた		1			
		Lagomorpha	うさぎ		1	4		
		Rodentia	ねずみ		23			
			りす			1		
	Proboscidea	ぞう		1				
Primates	人間		2		23			
想像上	Humanoid	魔女			23			
	Therianthrope	人魚		2				
		ニンフ		1				

室内に生息する動物の種数、個体数

調査から、室内には多様な「動物」が多数生息することが明らかになった。年長児クラスの2教室あわせて、17種167個体の「動物」の「生息」が確認された(カエルとオタマジャクシは同種だが生活型が異なるので別種と考えれば18種である)。内訳は、現生の動物が15種141個体、絶滅動物はなし、想像上の動物が3種26個体である(表1)。

現生の動物では、約半数にあたる9種64個体が哺乳類であった。既存のキャラクターは6種32個体であった。想像上の動物は、ヒト型が23個体(魔女)、半獣半人が2種3個体(リトルマーメイドと蝶の妖精)で、動物型、その他はいなかった。

「造物主」は誰か？

室内に生息する動物のほとんどは先生または園児の手作りであった。先生による「被造物」は12種51個体の現生動物(うち哺乳類が9種40個体)と想像上の動物のすべてであった。一方、園児による「被造物」は3種87個体であった。既製品はカレンダーに描かれたクマ、ひよこ、カエルのみである。園児の「被造物」は人間、カエル(とおたまじゃくし)、サカナであり、調査時に園児が作成していた7月の製作物はカブトムシとクワガタムシであった。先生の被造物には哺乳類が多く、園児の被造物は哺乳類以外の動物が多い傾向が示唆される。

生息地はどこか？

動物たちは室内のどこに生息しているのだろうか？先生による「被造物」の生息地は、おとうばん表、バスグループ表、おたんじょうび表などであった。それらは、園児そのもののアイコン(おたんじょうび表のミッキーマウス)として、あるいは園児のアイコンの周囲(おと

うばん表のレースクイーン)に生息していた。一方、園児による「被造物」は、季節感を演出するために用意された空間に生息していた。

生態・形態

室内の動物たちはどんな暮らしをしているのだろうか。先生による「被造物」のほとんどが衣服をまとい、直立姿勢をしていた。また生息空間も人工的な空間であった(レーシングサーキットなど)。一方、園児の作る動物のほとんどが自然の生態(湿原と池など)の中で本来の姿勢をしていた(表2)。

この違いは、先生による「被造物」に哺乳類が多く、園児によるものに哺乳類が少ないことを反映していると考えられるが、それだけでは説明できない。一例をあげると、先生の作ったカエルは着衣直立だが、園児の作ったカエルとオタマジャクシはそうではなかった。

考察

多様な「非実在動物」の可能性

今回はひとつの幼稚園のわずか2クラスの調査だったが、それでも、幼稚園の教室には多様な「動物」が多数生息していることが明らかになった。今回の調査は一回切りであったが、園児による毎月の製作物や季節感を出すための掲示、展示はおおむね月ごとに変わるであろう。年間を通じた動物相の変動を調べれば「非実在動物」の多様性はさらに高くなると考えられる。

しかも、これら「非実在動物」の多くは(私の直感的な予想に反して)現生の動物種であった。そしてそれらは日常的な先生の保育実践や園児の活動によって作り出されていた。園児は先生や自らが作り出した動物に愛着を抱くであろう。したがって、これら室内の「非実在動物」

表2 動物の服装、姿勢

造物主	現生か	綱	着衣		はだか	
			直立	自然な姿勢	直立	自然な姿勢
先生	現生	Amphibia	1		1	
		Aves				8
		Gastropoda				1
		Mammalia	キャラクター	25	3	
		オリジナル	8			
	想像上	キャラクター		3		
		オリジナル	23			
園児	現生	(Pisces)				18
		Amphibia				46
		Mammalia			23	
既製品	現生	Amphibia			1	
		Aves			1	
		Mammalia		1		

たちは園児への環境教育の素材として高い可能性を持つと考えられる。

「仲間」と「自然」：動物の持つ意味

桐ヶ丘幼稚園の室内に生息する「動物」たちはその造物主や生態から二つのパターンに分けられる。ひとつは、先生によって作られ、擬人化・キャラクター化された動物たち。それらの多くは哺乳類で、おそらく年間を通じて生息する。もうひとつは、主に園児によって作られ、ステレオタイプ化はしているものの、本来の姿、生息地に暮らす動物たち。それらの多くは昆虫や魚類など哺乳類以外の分類群の動物で、おそらく月ごとに置き換わってゆく。

先生が作る擬人化された動物は、園児そのもののアイコンとして、あるいは園児のアイコンの周囲に存在している。ほとんどが笑顔で、着衣直立が基本である。これらの動物は園児と同じ目線で生活空間を共有する「仲間」として存在しているかのようなのである。その一方で、かれらは生物としてのリアリティを剥奪された、いわば「素材」として扱われている。

事実、先生たちや、また幼児教育を学ぶ本学子ども学部の学生たちに話をきくと、室内掲示などの環境構成のために作成する動物の意匠は、市販の「素材集」から借用しているケースがほとんどであった(そうでなければ、ディズニーキャラクターなどの既存のキャラクターを使う)。まさに「素材」であり、それが「動物」である意味は問われていない。

それに対し、園児が作る動物たちは自然環境を模した空間の中に、ありのままに近い姿で生息している。それらは「自然」の象徴であり、そしてその「自然」は季節とともにうつろうものである。季節感＝自然を感じる素材として、昆虫や魚など哺乳類以外を中心とする動物を園児に製作させ、活動を通じて自然に親しんでもらおうという先生の意図が読み取れる。

まとめると、幼稚園の室内の「非实在動物」たちには、園児と并列あるいは園児を見守る「仲間」としての意味を持つものと、園児をとりまく「自然」を象徴するものの2種類があると言える。そして前者は先生によって提供され、後者は園児自身によって創造される。

「非实在動物」に投影される保育者の動物観

幼稚園の室内掲示の「非实在動物」には、保育者のどのような動物観・自然観が投影されているだろうか。上に先生の創造する「動物」には「仲間」という意味が付与されていると述べた。本物の哺乳類のすべてが人間に対してフレンドリーであるわけではない。むしろ愛玩用に飼い慣らされた動物以外のほとんどの哺乳類は、人間と緊張関係を持って暮らしている。日本の野生動物、シカ、サル、イノシシ、クマ、キツネ、タヌキなどはいずれも作物を荒らしたり人を傷つける「害獣」としての側面を

持っている。しかし、幼稚園の室内においてはそうした哺乳類のマイナスイメージは捨象され、人間と同じ姿をして、笑顔で園児をとりまいている。いわば、哺乳類は自然界の存在ではなくコンパニオン・アニマルとして人間界にいる存在なのである。

一方、自然界に属する哺乳類以外の動物に関しては「季節性」との強い関連性を読み取ることができる。もっともこれは保育者の動物観というより、幼稚園教育要領の指示するところかもしれない。

哺乳類＝コンパニオンアニマルという動物観は、野生哺乳類と接する機会が失われた現代日本においてはむしろ自然な動物観と言えるかもしれない。しかし、生物多様性保全の観点からみると、幼稚園児に対してもっと野生哺乳類の存在に対する気づきを促す活動があってよいと思う。園児が日常的に目にする室内掲示物にそうした仕掛けをほどこすことは有効だろう。たとえば「おたんじょうび表」を里山の風景にして園児をさまざまな野生動物に模してもいいし、「バスグループ表」の隅に道路の傍らでバスをやりすごしているタヌキがいてもいいし、「おとうばん表」の中ではサルが給食のデザートを狙っていてもおもしろい。また、室内掲示物以外でも、たとえば動物飼育活動において過度の擬人化を避け、エサをあげる際に「このウサギはみんなからエサをもらって生きてるけど、野うさぎさんは何を食べているんだろうね?」といった発問をするなど、園児が野生動物に思いを馳せるような促しをすることは有効だろう。

ひとつ気になったのが、哺乳類が擬人化される過程で動物種ごとの性質が消失している点である。言い換えれば動物が没個性化しているのだ。たとえば「おとうばん表」に生息していたウサギとネコの形は、耳としば以外にほとんど差異が認められなかった。またそこにその種がいる必然性も希薄である。たとえば日めくりカレンダーの年、月、日がそれぞれブタ、リス、ウサギである理由がないのである。

哺乳類の没個性化には市販の「素材集」の影響があると思われる。筆者が目にしたある素材集には「この本の中の動物は、すべて同じ型紙から作れます。」と書かれていた。それは製作の手間を省くという利点があるかもしれないが、もしも掲示に使われるそれぞれの動物が種の特徴を備えたリアルなものであったなら、園児は室内掲示を通して生物の多様性を感じる機会を得られるのと思うと残念である。図鑑からとってきたようなリアルな動物の姿は掲示としての親しみに欠けると考える人もいるかもしれない。しかし、たとえばベアトリス・ポターの「ピーターラビット」や「のねずみチュウチュウおくん」などは、動物が擬人化されながらもリアルな形態を維持しており、むしろそのために登場する動物たちの愛くるしさが印象的である。

おわりに

かつて絵本や昔話に登場する動物たちは、擬人化されながらも、それぞれの種の特徴や人間との関わりの特徴を反映した姿でいきいきと描かれていた。絵本の中でオオカミに立ち向かうのがヒツジでなくヤギであることが多いのは、実際にヤギのほうがヒツジより捕食者に対して勇敢だからである。キツネやタヌキが意地悪で狡猾なのは、実際のキツネやタヌキが農家の食料を荒らしたり家禽を殺してしまう害獣だからである。ウサギが人間の味方なのは、実際のウサギがあまり人間に悪さをせず、毛皮や肉が人間の役にたつからであろう。

一方、現代の日本では、幼稚園教諭や保育士に限らず、若い人が野生の動植物と日常的に接しリアリティのある動物のイメージを抱くことが困難になりつつある。そのことが掲示の動物の画一化の要因の一つであることは想像に難くない。現場で子どもたちに豊かな自然観を提示できる幼稚園教諭・保育士を養成するには、かれらに対し自然界の多様性とその魅力を伝える教育が求められる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、中部学院大学附属桐ヶ丘幼稚園の高橋良明園長ほか先生方には、調査の便宜を計っていただき、大変お世話になった。園児、とくにふじ組ときく組のみなさんには、室内をじろじろ見渡す不審なおじさんを温く受け入れていただいた。中部学院大学子ども学部の西垣吉之、水野友有両氏には多くの助言をいただいた。感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 藤崎亜由子. 幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解. 発達心理学研究, 15(1):40-51, 2004.
- [2] 山下久美. ムシ飼育のねらいとその飼育経験効果について: 幼稚園・保育園におけるムシの飼育の意味. 東洋英和女学院大学人文・社会科学論集, 23:79-98, 2006.
- [3] 石田高幸, 加藤輝夫, 目黒徹三, 山内昭道. 現代の子どもの動物に対する感情についての考察II: 生活環境による考察. 日本保育学会大会研究論文集, (41):100-101, 1988.
- [4] 窪龍子, 中村美津子, 喜田敬. 乳幼児の生活環境の中の動物達(第5報): 日米英仏の幼稚園における調査. 日本保育学会大会研究論文集, (48):346-347, 1995.
- [5] 鍋島恵美, 高野史朗, 光村智香子. ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ-ウサギの飼育の保育を通して. 京都教育大学環境教育研究年報, (18):1-24, 2010.